

主食パターンの多様化と地域的特徴

——昭和54年度実地調査結果から——

内 野 澄 子

は し が き

昭和54年度において厚生省人口問題研究所が行なった“人口高齢化に伴う生活構造の変化に関する調査”の一環として、主食パターン調査がふくまれている。本稿は、特にこの主食パターンの分布の特徴を地域別、男女別、年齢別に分析を行なったものである。

本調査の対象地域は、典型的な巨大都市として東京都から目黒区、墨田区、大都市としては広島市、中都市として山形市、平地農村として宮城県から3町（桃生町、米山町、志波姫町）、また農山村として鹿児島県から3町（大根占町、祁答院町、大浦町）の合計9,000世帯を選択し、抽出された世帯に常住する30歳以上の調査対象者全員に配票し、対象者自身が記入する配票自計（留置法）によって調査を行なった。

調査の配票数は18,788票、そのうち有効回収票は18,337票（回収率97.6%）である。配票数は地域により多少異なっているが、地域あたり平均約1,800前後である。また広島市、山形市では調査区の特徴によってホワイト・カラー層の多い地区、ブルー・カラー層の多い地区の2地区に区分して主食パターンの分布を考察した。

次に、各調査地域の職業分布（昭和50年国勢調査）において、もっとも多い（その地域で第1位にあげられた）職業によって特徴づけてみると次の如くである。

東京都目黒区：事務従事者（26.7%）

東京都墨田区：技能工、生産工程作業員および単純労働者（35.4%）

広島市：技能工、生産工程作業員および単純労働者（29.8%）

山形市：技能工、生産工程作業員および単純労働者（27.0%）

宮城県（3町）：農林、漁業作業員（51.7～67.2%）

鹿児島県（3町）：農林、漁業作業員（52.9～62.7%）

なお、本調査の詳細な内容については、“昭和54年度実地調査、人口の高齢化に伴う生活構造の変化に関する調査”の概報および主要結果表、厚生省人口問題研究所、昭和55年5月、参照されたい。

ここでの主食パターンは、1日3回の主食の組合せによるものである。調査実施に当っては、あらかじめ次にあげる7つのパターンを設定し、その中から該当するパターンを選択させた。特に(7)その他については詳細に記入させた。

記 号 主食組合せ

- (1) 111 パターン：3食米飯
- (2) 131 パターン：昼めん、朝・夕米飯
- (3) 141 パターン：昼パン、朝・夕米飯
- (4) 411 パターン：朝パン、昼・夕米飯

- (5) 011 パターン：朝欠食，昼・夕米飯
- (6) 911 パターン：朝穀類以外，昼・夕米飯
- (7) その他パターン：以上の6パターン以外の組合せ

なお，以下分析にあたり，主食パターンについては，上記の記号を用いることにする。また，集計に際して(6)911パターンは極めて少ないため“その他”パターンに含めた。

I 地域別にみた主食パターンの基本的特徴

(1) 地域別にみた特徴

まず，全調査地域について，主食パターンの分布をみると表1の如くである。地域により著しい差異がみられる。

表1 地域別，主食パターンの分布

30歳以上の人

地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他
(男女計)		実 数					
東京都目黒区	1,363	256	178	142	414	68	291
東京都墨田区	1,459	471	307	143	305	69	88
広島市	2,939	1,089	177	181	1,120	107	198
広島市(ホワイト)	1,618	527	119	108	629	67	123
広島市(ブルー)	1,321	562	58	73	491	40	75
山形市	3,486	1,793	770	254	176	130	247
山形市(ホワイト)	2,347	1,098	600	211	147	103	217
山形市(ブルー)	1,049	695	170	43	29	27	30
宮城県桃生町	1,559	1,178	101	20	11	8	14
宮城県志波姫町	1,423	993	117	37	13	12	14
宮城県米山町	1,550	1,342	114	19	9	2	4
鹿児島県大根占町	1,992	1,112	24	9	6	20	7
鹿児島県祁答院町	1,211	1,095	32	6	18	12	13
鹿児島県大浦町	983	752	13	7	61	23	14
		割 合					
東京都目黒区	100.0	18.8	13.1	10.4	30.4	5.0	21.3
東京都墨田区	100.0	32.3	21.0	9.8	20.9	4.7	6.0
広島市	100.0	37.1	6.0	6.2	38.1	3.6	6.7
広島市(ホワイト)	100.0	32.6	7.4	6.7	38.9	4.1	7.6
広島市(ブルー)	100.0	42.5	4.4	5.5	27.2	3.0	5.7
山形市	100.0	51.4	22.1	7.3	5.0	3.7	7.1
山形市(ホワイト)	100.0	45.1	24.6	8.7	6.0	4.2	8.9
山形市(ブルー)	100.0	66.3	16.2	4.1	2.8	2.6	2.9
宮城県桃生町	100.0	75.6	6.5	1.3	0.7	0.5	0.9
宮城県志波姫町	100.0	69.8	8.2	2.6	0.9	0.8	1.0
宮城県米山町	100.0	86.6	7.4	1.2	0.6	0.1	0.3
鹿児島県大根占町	100.0	93.3	2.0	0.8	0.5	1.7	0.6
鹿児島県祁答院町	100.0	90.4	2.6	0.5	1.5	1.0	1.1
鹿児島県大浦町	100.0	76.5	1.3	0.7	6.2	2.3	1.4

備考：各地域の主食パターン不詳を除いた。また，911パターンは“その他”パターンに含めた。

第1に、111パターンをとるものの割合は農村地域において著しく高く70~90%の水準にあるのに対して、都市ではほぼ50%未満であり、かつ大都市ほど低水準である。たとえば、東京都目黒区では20%未満と極端に低く、墨田区では32.3%、広島市37.1%、山形市51.4%と都市規模が小さくなるにしたがって増大している。

第2は、同じ都市地域でもその社会経済的特性によってこの111パターンをとるものの割合に大きな差がみられたことである。東京都の目黒区は山手としてホワイト・カラーの事務従事者が多いといった特徴がみられるが、ここでは111パターンをとるものの割合が少なく、反対に下町とよばれる墨田区はブルー・カラーの多いといった経済的特徴がみられ、したがって111パターンをとるものの割合が高いのである。同様の傾向は、広島市、山形市の両市においてもはっきりとみとめられる。広島市のホワイト・カラー層の多い地区では32.6%と低く、反対にブルー・カラー層の多い地区では42.5%と高く、その差は大きい。山形市でも、両者はそれぞれ45.1%、66.3%とその差は極めて大きい。111パターンの割合が同じ都市地域でも職業によって著しく異なることに留意を要するであろう。

第3は、中都市の山形市および農村地域では、111パターンが支配的な主食パターンとなっているのに対し、東京都の如き巨大都市においては支配的パターンといわれる主食パターンが存在せず、複数の主食パターンで多様化しているのである。この点は、主食パターンの分布や将来の変化を検討する際に考慮されるべき重要なポイントであろう。たとえば、目黒区では411パターンをとるものの割合が30.4%でもっとも多いが、“その他”パターンをとるものの割合が21.3%、次いで111パターンをとるものの割合が18.8%であり、これらは重要なパターンとなっている。つまり、東京都の目黒区のばあいは、3つの主要パターンで構成されているといえる。しかし、131と141のパターンを合計すると23.5%となるから、このパターンを1つのグループと考えると目黒区では4つの基礎的、複合パターンで構成されているとさえいえよう。

しかし、東京都の墨田区では111パターンをとるものの割合が30%を越えもっとも多いパターンとなっているが、131と141パターンを合計したものは30.8%とさらに高くなり、次いで411パターンの20.9%を考慮すると墨田区の主食パターンは3つの基本的、複合的パターンで構成されている。

広島市についてみると、111パターンと411パターンがそれぞれ37.1%、38.1%とほぼ同水準にあり、これ以外の主食パターンをとるものの割合は著しく低いから、ここでは2つの主食パターンで支配されているといえよう。

山形市では、111パターンの割合が50%を越えており、あきらかに支配的パターンといえるが、131パターンが22.1%と高く、重要な補足的パターンとなっている。特に、山形市のホワイト・カラー層の多い地区ではこの傾向が強く、ブルー・カラー層の多い地区では弱くなっている。しかし、農村地域においては、111パターンが典型的な支配的パターンとなっている。中都市の代表としての山形市は、農村地域と大都市地域の間位置する過渡期的特徴をもった主食パターン構造を示しているといえよう。

第4は、011パターンが都市では大体4~5%の水準にあるのに対し、農村地域では1%前後の低水準にあるということである。

(2) 男女別にみた基本的特徴

まず、男女別に各地域別に主食パターンの分布をみると表2の如くである。

主食パターンの分布は、地域によって著しく異なっていることがあきらかに理解される。

その詳細については後述するが、ここでは全調査地域を対象とし男女別にその傾向を考察してみよう。

表2 地域別, 男女別, 主食パターンの分布

(%)

地 域	総 数	1 111	2 131	3 141	4 411	5 011	そ の 他
男							
東京都 目黒区	100.0	19.6	14.1	8.2	30.5	5.9	20.7
東京都 墨田区	100.0	32.5	22.0	7.5	21.2	5.9	5.4
広島市	100.0	40.3	6.4	4.1	35.0	4.8	7.1
広島市(ホワイト)	100.0	36.2	7.1	4.0	36.2	5.6	7.9
広島市(ブルー)	100.0	45.5	5.4	4.2	33.4	3.7	6.2
山形市	100.0	52.0	23.0	5.3	4.7	4.2	8.0
山形市(ホワイト)	100.0	45.6	25.8	6.1	5.5	5.1	9.8
山形市(ブルー)	100.0	67.1	16.6	3.3	2.7	2.2	3.7
宮城県 桃生町	100.0	75.4	6.2	1.0	0.4	0.7	1.1
宮城県 志波姫町	100.0	71.6	7.3	1.6	0.6	1.0	1.2
宮城県 米山町	100.0	86.1	7.8	0.9	0.4	0.1	0.3
鹿児島県 大根占町	100.0	94.2	1.8	0.7	0.4	0.7	0.5
鹿児島県 祁答院町	100.0	91.9	2.2	0.9	0.9	—	1.3
鹿児島県 大浦町	100.0	79.6	0.9	0.9	4.9	1.9	1.6
女							
東京都 目黒区	100.0	18.1	12.1	12.3	30.2	4.2	21.9
東京都 墨田区	100.0	32.1	20.1	12.0	20.6	3.6	6.5
広島市	100.0	34.1	5.7	8.1	40.9	2.6	6.4
広島市(ホワイト)	100.0	29.1	7.6	9.2	41.4	2.8	7.3
広島市(ブルー)	100.0	40.0	3.5	6.7	40.4	2.4	5.2
山形市	100.0	50.9	21.3	9.1	5.4	3.3	6.3
山形市(ホワイト)	100.0	44.6	23.6	10.9	6.5	3.5	8.1
山形市(ブルー)	100.0	65.5	15.9	4.8	2.9	2.9	2.1
宮城県 桃生町	100.0	75.7	6.7	1.5	0.9	0.4	0.7
宮城県 志波姫町	100.0	68.1	9.0	3.5	1.2	0.7	0.8
宮城県 米山町	100.0	87.0	6.9	1.5	0.7	0.1	0.2
鹿児島県 大根占町	100.0	92.5	2.2	0.8	0.6	2.5	0.6
鹿児島県 祁答院町	100.0	89.2	3.0	0.2	2.0	1.8	0.9
鹿児島県 大浦町	100.0	74.1	1.6	0.5	7.2	2.7	1.3

備考：主食パターンの不詳を除いたので総計が100%にならない。

第1点は、じゅうらいの分析においてあきらかにされてきたように、日本人の基本的パターンとしての111パターンは大都市から地方都市、農村へと人口の規模あるいは都市化の度合に応じて極めて規則的な減少傾向がみられることである。

まず男についてみると東京都目黒区のそれは19.6%、墨田区は32.5%、広島市の40.3%、山形市の52.0%、宮城県の78.0%（3町合計）、鹿児島県の89.3%（3町合計）とその傾向は顕著である。同じ東京都の巨大都市内の目黒区、墨田区であっても、山手地区と下町の地区とでは、職業や教育水準等の影響が食生活パターンに対し強くあらわれている。また、同じ地方農村県でも、宮城県の対象地域は平地農村であるのに対して、鹿児島県の対象地域は農山村であり、都市化の差の影響が主食パターンに反映していると思われる。

第2点は、111パターンの比重が地域によって著しく異なっていることである。東京都の目黒区では、411パターンをとるものの割合が30.5%でもっとも重要な主食パターンであって、111パターンは19.6%で第3位の主食パターンになっているのに対し（第2位は“その他”パターン）、墨田区では反対に111パターンの割合が32.5%で第1位であり、411パターンをとるものの割合は21.2%で第3位の主食パターンである（第2位は131パターン）。したがって目黒区とは丁度逆の構造を示している。またその他の地域でもすべて111パターンの割合が第1位的主食パターンとなっている。しかし、広島市のホワイト・カラーの多い地区では、111パターンと411パターンをとるものが同じ比重を示している。都市の人口規模の低下と共に111パターンの比重が高まり、他の主食パターンの地位も低下し、111パターンに集中化している。

第3点は、主食パターンの多様化が地域によって著しく異なっている。131と141パターンを1つのパターンとして合計し、主食パターンの分布の特徴をみると次の如くである。

(男)	(1) 3食米飯 (111)	(2) 昼めんあるいはパン (131+141)	(3) 朝パン (411)	(4) 朝欠食 (011)	(5) その他
(A) 東京都目黒区	19.6%	22.3%	30.5%	5.9%	20.7%
(B) 東京都墨田区	32.5	29.5	21.2	5.9	5.4
(C) 広島市	40.3	10.5	35.0	4.8	7.1
(D) 山形市	52.0	28.3	4.7	4.2	8.0
(E) 宮城県	78.0	8.3	0.4	0.6	0.8
(F) 鹿児島県	89.3	2.5	1.8	0.8	1.1

主食分布パターンの多様化は、(A)から(F)までの5つの型に区分することができる。(A)は東京都目黒区にみられる型で、411パターンを最高として(30.5%)、131+141パターン(22.3%)、“その他”パターン(20.7%)、111パターン(19.6%)の4つのパターンで構成されており、もっとも多様化した型である。次は(B)であって、東京都墨田区にみられるもので、111パターン(32.5%)を筆頭として、131+141パターン(29.5%)、411パターン(21.2%)の3つのパターンから構成されている。(C)は、111パターン(40.3%)と411パターン(35.0%)の2つのパターンで構成されている型である。(D)は(C)と同じく2つのパターンで構成されているが、(C)と異なっている点は、第2位的主食パターンが411パターンでなくて131+141パターンに変っていること、111パターンの比重が50%を越えて、このパターンへの依存度が(C)よりも高いことである。(E)は111パターンが圧倒的な位置を占めている型である。これらの主食パターンの分布の構成は、大きく分ければ4型、3型、2型、1型(3食米飯型)の4つの型に区分できるであろう。

次に女について考察してみよう。地域別にみた女的主食パターンの分布は、基本的には男のばあいと同じ傾向にあるといってよいであろう。ここでも男のばあいと同様に、主食パターンの分布の特徴を検討してみよう。ここでも131と141パターンを合計した割合をとると次の如くである。

(女)	(1) 3食米飯 (111)	(2) 昼めん・パン (131+141)	(3) 朝パン (411)	(4) 朝欠食 (011)	(5) その他
東京都目黒区	18.1%	24.4%	30.2%	4.2%	21.9%
東京都墨田区	32.1	32.1	20.6	3.6	6.5
広島市	34.1	15.8	40.9	2.6	6.4
山形市	50.9	30.4	5.4	3.3	6.3

宮 城 県	77.1	9.6	0.9	0.4	0.6
鹿 児 島 県	85.8	2.8	3.1	2.3	0.9

東京都目黒区の4型、墨田区の3型、広島市、山形市の2型、宮城県、鹿児島県の1型といった地域の特徴がみられる。男のばあいと比較してみると、111パターンをとるものの割合が男よりも若干低いことと、131+141パターンをとるものの割合が男よりも高いといった差異がみられる。しかし、基本的な特徴においては、差異はみとめられない。

(3) 男女別、年齢別にみた基本的特徴

まず、男の地域別、年齢別の主食パターンの分布構造をみると次表の如くである。

男の30～39歳のもっとも若い年齢層についてみてみよう。地域別にみると著しい特徴がみられる。第1点は、東京都の目黒区、墨田区の111パターンの割合が著しく低いということである。特に、目

表3 地域別、男女別、年齢別主食パターン分布

男		(%)						
地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他	
		総 数						
東京都目黒区	100.0	19.6	14.1	8.2	30.5	5.9	20.7	
東京都墨田区	100.0	32.5	22.0	7.5	21.2	5.9	5.4	
広島市	100.0	40.3	6.4	4.1	35.0	4.8	7.1	
広島市(ホワイト)	100.0	36.2	7.1	4.0	36.2	5.6	7.9	
広島市(ブルー)	100.0	45.5	5.4	4.2	33.4	3.7	6.2	
山形市	100.0	52.0	23.0	5.3	4.7	4.2	8.0	
山形市(ホワイト)	100.0	45.6	25.8	6.1	5.5	5.1	9.8	
山形市(ブルー)	100.0	67.1	16.6	3.3	2.7	2.2	3.7	
宮城県桃生町	100.0	75.4	6.2	1.0	0.4	0.7	1.1	
宮城県志波姫町	100.0	71.6	7.3	1.6	0.6	1.0	1.2	
宮城県米山町	100.0	86.1	7.8	0.9	0.4	0.1	0.3	
鹿児島県大根占町	100.0	94.2	1.8	0.7	0.4	0.7	0.5	
鹿児島県祁答院町	100.0	91.9	2.2	0.9	0.9	—	1.3	
鹿児島県大浦町	100.0	79.6	0.9	0.9	4.9	1.9	1.6	
		30 ～ 39歳						
東京都目黒区	100.0	16.2	16.2	7.7	35.9	7.7	15.5	
東京都墨田区	100.0	26.9	17.1	7.3	31.6	8.3	4.1	
広島市	100.0	40.1	7.2	1.9	37.5	5.8	6.3	
広島市(ホワイト)	100.0	38.3	8.4	1.3	36.1	7.5	6.6	
広島市(ブルー)	100.0	42.3	5.8	2.6	39.2	3.7	5.8	
山形市	100.0	51.7	20.2	3.4	6.4	7.6	6.7	
山形市(ホワイト)	100.0	46.0	22.7	4.2	7.7	8.3	8.3	
山形市(ブルー)	100.0	66.4	13.9	1.6	3.3	5.7	2.5	
宮城県桃生町	100.0	72.4	6.2	0.7	0.7	0.7	0.7	
宮城県志波姫町	100.0	66.9	8.3	2.5	1.7	3.3	0.8	
宮城県米山町	100.0	87.7	8.2	1.4	—	—	—	
鹿児島県大根占町	100.0	95.1	3.3	—	—	—	1.6	
鹿児島県祁答院町	100.0	92.1	3.2	—	1.6	—	1.6	
鹿児島県大浦町	100.0	76.9	2.6	—	—	5.1	5.1	

男 表3つづき

(%)

地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他
40 ～ 49歳							
東京都目黒区	100.0	23.8	17.5	5.0	29.4	6.3	17.5
東京都墨田区	100.0	36.4	23.4	4.9	17.4	6.5	5.9
広島市	100.0	42.5	6.6	5.6	32.6	4.6	6.7
広島市(ホワイト)	100.0	39.1	7.2	5.1	36.2	4.3	6.4
広島市(ブルー)	100.0	47.5	5.7	6.3	27.2	5.1	7.0
山形市	100.0	51.1	25.5	4.8	3.8	2.6	9.8
山形市(ホワイト)	100.0	44.9	28.9	5.0	4.0	3.7	11.6
山形市(ブルー)	100.0	66.9	16.9	4.2	3.4	—	5.1
宮城県桃生町	100.0	77.9	4.0	2.0	0.5	1.0	—
宮城県志波姫町	100.0	69.0	8.2	1.8	0.6	0.6	—
宮城県米山町	100.0	88.5	4.4	0.5	0.5	—	—
鹿児島県大根占町	100.0	96.8	0.6	1.3	—	0.6	—
鹿児島県祁答院町	100.0	92.5	2.3	1.5	0.8	—	0.8
鹿児島県大浦町	100.0	85.5	—	—	4.8	1.2	1.2
50 ～ 59歳							
東京都目黒区	100.0	18.6	11.6	5.4	13.8	6.2	24.0
東京都墨田区	100.0	31.8	29.5	9.3	12.4	3.1	5.4
広島市	100.0	37.0	5.4	2.5	38.8	4.7	9.5
広島市(ホワイト)	100.0	33.1	5.2	1.9	40.9	6.5	10.4
広島市(ブルー)	100.0	41.8	5.7	3.3	36.1	2.5	8.2
山形市	100.0	49.5	26.5	6.0	4.4	4.1	6.6
山形市(ホワイト)	100.0	41.2	30.1	6.9	5.1	5.1	9.3
山形市(ブルー)	100.0	67.3	11.9	4.0	3.0	2.0	1.0
宮城県桃生町	100.0	68.9	5.2	0.7	—	1.5	1.5
宮城県志波姫町	100.0	69.0	6.9	—	0.6	—	1.1
宮城県米山町	100.0	81.1	13.2	0.6	—	0.6	0.6
鹿児島県大根占町	100.0	96.5	0.7	1.4	—	0.7	—
鹿児島県祁答院町	100.0	90.0	1.7	1.7	—	—	2.5
鹿児島県大浦町	100.0	71.7	1.0	—	5.1	3.0	1.0

黒区のこの年齢層ではわずかに16%で、131パターン(16%)と全く同じ水準であり、また411パターン(35.9%)の半分以下、そしてまた“その他”パターン(15.5%)ともあまり変らないといった水準にある。いかに、この年齢層の主食パターンが多様化しているか、ないしは分裂しているかを理解することができよう。011パターンも約8%に達していることも注目されよう。東京都墨田区においても、111パターンをとるものの割合は27%と低く、411パターン(31.6%)よりかなり低水準にある。

広島市では、111パターン(40.1%)はもっとも多いが、411パターン(37.5%)も多く、この2つのパターンで全主食パターンの77.6%を占めている。

山形市では、111パターン(46.0%)が支配的なパターンとなり、131パターンが22.7%と多く、両者で68.7%を占めている。しかし、この地方中都市の山形市で注目される点は、011パターンが7.6%で、東京都目黒区や広島市と同じ水準にあることと、“その他”パターンが6.7%で、東京都目黒区の

男 表3つづき

(%)

地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他
		60 歳 ≤					
東京都目黒区	100.0	21.6	11.5	13.5	23.6	2.7	27.0
東京都墨田区	100.0	35.8	20.6	8.5	19.4	4.2	6.1
広島市	100.0	41.7	5.1	7.9	30.7	2.0	7.1
広島市(ホワイト)	100.0	32.3	6.8	9.8	31.6	0.8	9.8
広島市(ブルー)	100.0	52.1	3.3	5.8	29.8	3.3	4.1
山形市	100.0	55.2	21.9	7.5	3.4	1.5	7.2
山形市(ホワイト)	100.0	49.0	24.5	9.2	4.6	1.9	9.6
山形市(ブルー)	100.0	67.7	16.5	3.9	0.8	0.8	6.3
宮城県桃生町	100.0	81.2	7.1	0.5	0.5	—	2.5
宮城県志波姫町	100.0	80.5	5.3	3.0	—	0.6	2.4
宮城県米山町	100.0	88.8	4.3	1.1	1.1	—	0.5
鹿児島県大根占町	100.0	89.6	3.3	—	1.1	1.1	1.1
鹿児島県祁答院町	100.0	94.2	1.6	—	1.6	—	1.1
鹿児島県大浦町	100.0	82.1	1.2	1.7	5.8	1.2	1.7

備考：不詳を除いたため合計が100%にならない。

女

(%)

地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他
東京都目黒区	100.0	18.1	12.1	12.3	30.2	4.2	21.9
東京都墨田区	100.0	32.1	20.1	12.0	20.6	3.6	6.5
広島市	100.0	34.1	5.7	8.1	40.9	2.6	6.4
広島市(ホワイト)	100.0	29.1	7.6	9.2	41.4	2.8	7.3
広島市(ブルー)	100.0	40.0	3.5	6.7	40.4	2.4	5.2
山形市	100.0	50.9	21.3	9.1	5.4	3.3	6.3
山形市(ホワイト)	100.0	44.6	23.6	10.9	6.5	3.5	8.1
山形市(ブルー)	100.0	65.5	15.9	4.8	2.9	2.9	2.1
宮城県桃生町	100.0	75.7	6.7	1.5	0.9	0.4	0.7
宮城県志波姫町	100.0	68.1	9.0	3.5	1.2	0.7	0.8
宮城県米山町	100.0	87.0	6.9	1.5	0.7	0.1	0.2
鹿児島県大根占町	100.0	92.5	2.2	0.8	0.6	2.5	0.6
鹿児島県祁答院町	100.0	89.2	3.0	0.2	2.0	1.8	0.9
鹿児島県大浦町	100.0	74.1	1.6	0.5	7.2	2.7	1.3

15.5%は別として、東京都墨田区、広島市よりも高いということが注目される。このような中都市の山形市の30～39歳層にみられる特徴は、次にのべる如く他の年齢層にもみとめられるものであって、都市人口の規模にかかわらず、011パターンや“その他”パターンの比重がこの年齢層において高くなっていることは、地方都市時代の1つの傾向と考えることもできよう。

農村地域では111パターンが圧倒的に多く、70～95%の高水準にあり、それ以外のパターンは極めて少ない。

40～49歳の中年期についてみてみよう。巨大都市の東京都目黒区、墨田区では、111パターンと131パターンが30～39歳のそれよりもかなり増加し、411パターンをとるものの割合がかなり減少する。

111パターンの水準も広島市、山形市、農村地域へと進むにしたがって増大している。山形市の131

女 表3つづき

(%)

地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他
		30		～	39歳		
東京都目黒区	100.0	13.2	12.6	12.6	37.7	5.7	18.2
東京都墨田区	100.0	24.2	19.1	13.9	26.3	4.1	6.2
広島市	100.0	29.1	6.4	7.6	43.4	4.5	7.5
広島市(ホワイト)	100.0	25.8	7.7	7.7	42.9	4.7	9.4
広島市(ブルー)	100.0	33.3	4.8	7.4	43.9	4.2	5.3
山形市	100.0	45.2	22.0	10.1	8.1	5.2	6.2
山形市(ホワイト)	100.0	41.9	23.0	12.1	8.4	4.7	6.8
山形市(ブルー)	100.0	57.8	18.1	2.4	7.2	7.2	3.6
宮城県桃生町	100.0	73.7	7.2	1.3	1.3	—	0.7
宮城県志波姫町	100.0	60.7	10.7	7.4	4.1	2.5	—
宮城県米山町	100.0	88.6	4.5	0.8	0.8	0.8	0.8
鹿児島県大根占町	100.0	96.0	2.7	—	—	—	1.3
鹿児島県祁答院町	100.0	84.0	2.5	1.2	3.7	3.7	1.2
鹿児島県大浦町	100.0	75.5	—	1.9	15.1	1.9	1.9
		40		～	49歳		
東京都目黒区	100.0	18.1	11.6	10.1	31.2	4.5	22.1
東京都墨田区	100.0	28.4	18.8	11.9	23.9	2.8	9.7
広島市	100.0	31.4	5.4	5.7	45.6	1.9	7.6
広島市(ホワイト)	100.0	24.7	8.5	6.9	48.2	2.4	7.7
広島市(ブルー)	100.0	40.9	1.1	4.0	42.0	1.1	7.4
山形市	100.0	47.1	20.9	10.3	4.9	2.5	8.9
山形市(ホワイト)	100.0	41.6	23.1	11.2	5.0	3.3	12.2
山形市(ブルー)	100.0	58.7	16.1	8.4	4.9	0.7	2.1
宮城県桃生町	100.0	75.6	5.1	1.5	0.5	—	—
宮城県志波姫町	100.0	68.9	6.6	2.6	0.5	—	1.0
宮城県米山町	100.0	86.2	7.4	1.1	1.1	—	0.5
鹿児島県大根占町	100.0	96.3	0.6	1.2	0.6	1.2	—
鹿児島県祁答院町	100.0	90.6	3.1	—	1.6	0.8	0.8
鹿児島県大浦町	100.0	69.9	2.2	2.2	6.5	3.2	—

パターンは25.5%で他のいずれの地域よりも高い。また山形市の“その他”パターンが9.8%であって、東京都目黒区の17.5%よりも低い。東京都墨田区、広島市よりもかなり高いことが注目される。しかし、山形市の011パターンはさすがに低く2.6%であって、前述の東京都の2区や広島市よりも低い水準にある。

50～59歳についてみると、この年齢層においても東京都目黒区では111パターンをとるものの割合が18.6%と低く、411パターンが32%、“その他”パターンが24.0%と著しく高いことが注目される。

111パターンをとるものの割合は、東京都目黒区を最低とし、東京都墨田区、広島市、山形市、農村地域へと進むにしたがって高くなっていることは、他の年齢と同様である。131パターンをとるものの割合は、東京都墨田区が最高で29.5%、次いで山形市が26.5%と高くなっている。山形市のばあい、注目すべきは、前述の如く“その他”パターンが9.3%であって、東京都目黒区を除くと他の都市地域と同水準にある。011パターンも東京都墨田区、広島市よりも高く5.1%を示している。141パ

女 表3つづき

(%)

地 域	総 数	111	131	141	411	011	そ の 他
		50	～	59歳			
東京都目黒区	100.0	12.3	11.6	11.6	32.2	4.8	19.2
東京都墨田区	100.0	31.1	21.2	16.6	16.6	5.3	3.3
広島市	100.0	34.9	4.5	9.0	42.6	1.0	5.5
広島市(ホワイト)	100.0	31.0	5.5	10.3	42.8	0.7	7.6
広島市(ブルー)	100.0	38.9	3.5	7.6	42.4	1.4	3.5
山形市	100.0	50.6	20.3	9.0	7.0	3.0	6.1
山形市(ホワイト)	100.0	44.4	22.2	10.8	9.0	2.5	8.2
山形市(ブルー)	100.0	65.0	15.8	5.0	2.5	4.2	0.8
宮城県桃生町	100.0	65.9	7.7	1.6	1.1	1.1	2.2
宮城県志波姫町	100.0	62.3	12.0	2.3	—	0.6	0.6
宮城県米山町	100.0	80.9	10.9	2.2	1.1	—	—
鹿児島県大根占町	100.0	93.4	1.8	0.6	1.2	2.4	—
鹿児島県祁答院町	100.0	89.8	3.4	—	1.4	1.4	1.4
鹿児島県大浦町	100.0	67.1	1.4	—	6.4	5.0	0.7
		60	歳	≤			
東京都目黒区	100.0	26.8	12.9	14.4	23.2	3.1	18.6
東京都墨田区	100.0	46.9	19.6	7.3	14.0	3.4	5.0
広島市	100.0	45.6	5.7	11.4	28.8	1.6	4.4
広島市(ホワイト)	100.0	42.5	6.9	13.1	26.9	1.9	3.8
広島市(ブルー)	100.0	48.7	4.5	9.6	30.8	1.3	5.1
山形市	100.0	59.1	22.1	6.8	2.0	2.5	4.5
山形市(ホワイト)	100.0	50.8	26.3	8.8	3.0	3.0	5.7
山形市(ブルー)	100.0	74.4	14.4	3.3	—	1.7	2.2
宮城県桃生町	100.0	82.4	0.8	2.0	0.8	0.4	0.4
宮城県志波姫町	100.0	77.9	8.2	2.6	0.4	0.4	1.3
宮城県米山町	100.0	91.2	4.2	1.9	0.5	—	—
鹿児島県大根占町	100.0	87.8	3.3	0.9	0.5	4.7	0.9
鹿児島県祁答院町	100.0	91.3	2.6	—	1.3	1.7	0.4
鹿児島県大浦町	100.0	83.5	2.5	—	7.0	1.5	2.0

ターンの水準自体は6.9%と低いですが、東京都目黒区や広島市よりも高い。

60歳以上についてみると、111パターンをとるものの割合は、それぞれ高くなるが、その水準の地域別序列は他の年齢のばあいと同様に変わらない。131パターンの割合は、山形市が最高で21.9%、次いで東京都墨田区20.6%、目黒区11.5%となっている。411パターンの割合では、広島市がトップで30.7%、第2位は東京都目黒区の24%、第3位は墨田区の19.4%となっている。“その他”パターンでは、この年齢層においても東京都目黒区が特に著しく27%という高水準を示している。しかし、その他の都市では山形市の7.2%が目される、墨田区は6.1%、広島市は7.1%で山形市よりも低い。

次に女についてみてみよう。

まず30～39歳層についてみると、111パターンをとるものの割合では、東京都目黒区の異常に低い13.2%が目される。目黒区のこの年齢層の女の主食パターンの分布はどうなっているかが問題になりそうである。100人の女のうち、111パターンをとるものはわずかに13人、411パターンをとるもの

が約40人，“その他”パターンをとるものが18人，131または141パターンをとるものがそれぞれ約13人といった殊な分特布構造を示している。

111パターンをとるものの割合は他の地域においても男より少なくなっている。東京都墨田区でも24%，広島市で29%と低い。しかし，山形市になると45%と高くなり，農村ではほぼ70~90%といった水準にある。

131パターンは山形市が最高で22.0%を示し，東京都墨田区が19.1%，東京都目黒区が12.6%となっている，141パターンでは，目黒区12.6%，墨田区13.9%と高いが，これに次いで山形市が高く10.1%となっていることが注目される。411パターンは大都市で高く，広島市が43.4%で最高，次いで目黒区37.7%，墨田区26.3%となっている。011パターンでは山形市の5.2%が目をひく，東京都目黒区の5.7%より低い墨田区の4.1%，広島市の4.5%よりも高い。“その他”パターンでも山形市の6.2%は，東京都目黒区の18.2%は別として，墨田区(6.2%)，広島市(7.5%)とあまり変らない水準にある。

40~49歳についてみるとその特徴は次の如くである。111パターンをとるものの割合は，いぜんとして東京都目黒区で低く，18.1%であることが注目される。次いで墨田区の28.4%，広島市の31.4%と低い。山形市でもなお50%以下で47.1%という低水準である。宮城県，鹿児島県では70~96%で著しく高い。もっとも，宮城県志波姫町の如く70%以下のところもあるが，主食パターンの不詳であるものが多いことを考慮に入れると実際には80%以上であると予想される。

131パターンは，山形市がトップで20.9%，次いで墨田区の18.8%，目黒区の11.6%が高く，宮城県，鹿児島県では極めて低い。141パターンでも，山形市，東京都墨田区，目黒区がそれぞれ10.3%，11.9%，10.1%とほぼ同水準にある。411パターンでは，広島市45.6%，東京都目黒区31.2%，墨田区23.9%と高いが，山形市ではわずか4.9%と低くなっている。“その他”パターンでは，ここでも東京都目黒区の22.1%が目立っている。しかし，山形市の8.9%は，墨田区の9.7%，広島市の7.6%とほぼ同水準であることは注目を要するであろう。

50~59歳層についてみてみよう。111パターンをとるものの割合は，東京都目黒区でわずか12.3%と著しく低く，40~49歳層の18.1%をはるかに下回っている。しかし，墨田区では31.1%，広島市では34.9%となっており，40~49歳層よりも若干高い。山形市も50.6%となり，40~49歳層の47.1%よりも高い。一般に，年齢の上昇と共に111パターンをとるものの割合が増大する傾向があるが，東京都目黒区の12.3%の低水準がどのような理由によるものか検討を要する点である。131あるいは141パターンでは，各地域とも40~49歳年齢層とほぼ類似した水準に安定している。411パターンについてみると，この50~59歳でも40~49歳とあまり差がない。しかし，東京都墨田区は40~49歳の23.9%に対し，50~59歳では16.6%とかなり少なくなっている。山形市では40~49歳の4.9%に対し，50~59歳では9.0%とかなり多くなっている。“その他”パターンでは，東京都目黒区ではなお19.2%と著しく高いが，墨田区や広島市では40~49歳層に比較してかなり低水準である。しかし，山形市では，40~49歳の8.9%に対し，50~59歳層でも8.2%とあまり差がないことが注目される。

60歳以上の老年人口についてみると，まず，111パターンをとるものの割合が全般に高くなっていることがみとめられる。東京都目黒区においては26.8%であり，50~59歳の12.3%の2倍以上である。墨田区では46.9%，広島市45.6%と高くなっている。また山形市では59.1%であり，50~59歳の50.6%よりは若干高い宮城県，鹿児島県では80~90%の高水準を示しており，50~59歳よりもさらに高い割合となっている。

しかし，この60歳以上人口の131あるいは141パターンをとるものの割合は，50~59歳層とあまり差

がみられない。ただ東京都墨田区での141パターンが50～59歳では16.6%と高いのに対して、60歳以上では7.3%と半分以下となっている。411パターンでは、50～59歳に比較していずれの地域でもかなり低水準になっている。しかし、“その他”パターンでは、60歳以上の年齢層においても東京都目黒区では18.6%と高く、また墨田区でも50～59歳よりも高い。山形市では50～59歳の6.1%に対して、60歳以上でも4.5%の水準にあり、食生活の多様化への傾向がよみとれる。

II 東京都目黒区の男女、年齢別主食パターン分布の特徴

職業別にみると（昭和50年国勢調査結果）この区は事務従事者が第位の割合を示して（26.7%）いる山手地域である。男女、年齢別に主食パターンの分布をみると表4の如くである。すでにのべた如く、調査全地域の中でもこの地域は主食パターンがもっとも多様化しており、特に411パターンをとるものの割合が111パターンをとるものの割合をはるかに上回っていることと、“その他”パターン*が111パターンよりも多いといった点で極めて特徴的である。

年齢別にみると、以上の特徴はさらにはげしいものとなる。男についてみると111パターンは30～39歳でもっとも少なく（16.2%）、40～49歳でもっとも多い（23.8%）。どの年齢でも、411パターンがもっとも多いが特に30～39歳では35.9%と高く、111パターンの16.2%の2倍以上の高水準にある。60歳以上の高年齢では著しく特徴のある主食パターンの分布を示している。それは、111パターンもかなり多く21.6%を示しているが、“その他”が最高で27.0%、411パターンが23.6%と高く、111パターンはこれに次いで第3位となっていることである。131と141パターンを合計すると25.0%となる。したがって、60歳以上の男の主食パターンは、“その他”パターン（27.0%）、131+141パターン

表4 東京都目黒区男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	622(100.0)	122(19.6)	88(14.1)	51(8.2)	190(30.5)	37(5.9)	129(20.7)
	30～39	142(100.0)	23(16.2)	23(16.2)	11(7.7)	51(35.9)	11(7.7)	22(15.5)
	40～49	160(100.0)	38(23.8)	28(17.5)	8(5.0)	47(29.4)	10(6.3)	28(17.5)
	50～59	129(100.0)	24(18.6)	15(11.6)	7(5.4)	41(31.8)	8(6.2)	31(24.0)
	60 ≤	148(100.0)	32(21.6)	17(11.5)	20(13.5)	35(23.6)	4(2.7)	40(27.0)
女	総 数	741(100.0)	134(18.1)	90(12.1)	91(12.3)	224(30.2)	31(4.2)	162(21.9)
	30～39	159(100.0)	21(13.2)	20(12.6)	20(12.6)	60(37.7)	9(5.7)	29(18.2)
	40～49	199(100.0)	36(18.1)	23(11.6)	20(10.1)	62(31.2)	9(4.5)	44(22.1)
	50～59	146(100.0)	18(12.3)	17(11.6)	17(11.6)	47(32.2)	7(4.8)	28(19.2)
	60 ≤	194(100.0)	52(26.8)	25(12.9)	28(14.4)	45(23.2)	6(3.1)	36(18.6)

備考：年齢不詳男43，女43，主食パターン不詳男5，女9を除いた。なお、()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

*) “その他”パターンの内訳はパン，めん類，米飯パターンが52%，パン，パン，米飯パターンが18%含まれている。

(25.0%), 411パターン (23.6%), 111パターン (21.6%) の4種類がそれぞれ20%以上の水準で分布しているというきわだった特徴がみられる。

女の年齢別についてみると、男のばあいとはほぼ同様な傾向がみられる。若干異なった特徴は次の如くである。第1は、30～39歳と50～59歳において、111パターンをとるものの割合が著しく低く、それぞれ13.2%、12.3%となっていることと、411パターンがそれぞれ37.7%、32.2%と著しく高くなっていることである。特にここでのもっとも若い30～39歳の女では411パターンが38%と極めて高い。男でもこの30～39歳が411パターンをとるものの割合がもっとも高く36%となっているが、女の方がさらに高い。第2は、60歳以上では111パターンをとるものの割合がもっとも多く26.8%で他のいずれのパターンよりも多くなっている。この年齢層と50～59歳層で対照的な点は、111パターンが60歳以上ではもっとも高いのに対して、50～59歳では12.3%でもっとも低く、411パターンでは60歳以上の23.2%に対して50～59歳では32.2%であって、9ポイントも多くなっていることである。この接続した年齢で、以上のような主食パターン分布の差異がでるのは、この現在50代のものの子供から成長期にかけての時期における日本の食パターンの変化の影響および現在の家族構成員の影響によるものたとえば同居する子供の食生活からの影響かとも思われる。第3は、011パターンである。一般的にいて男において多いが、年齢が高まるにつれて減少する傾向は男女間においてほぼ共通である。第4は、131あるいは141パターンである。男では、131パターンと141パターンを比較すると一般的に、前者の方がはるかに高く、60歳以上を除いて、ほぼ2倍となっている。しかし、女ではどの年齢層でも両者のパターンは12%前後の同水準にあることが注目される。第5は、60歳以上を除くとどの年齢の女においても411パターンがもっとも多いが、60歳以上になると131あるいは141パターンを合計したものが27.3%でもっとも多く、次いで111パターンが26.8%で第2位、411パターンが23.2%で第3位、“その他”パターンが18.6%で第4位となっている。いずれにしても、男に比較して女の方の主食パターンの分布はより広汎に分散している。

Ⅲ 東京都墨田区の男女、年齢別主食パターン分布の特徴

東京都墨田区は、職業別分布からみると技能工、生産工程作業員および単純労働者の割合が第1位で35.4%（昭和50年国勢調査結果）を占めており、目黒区のサラリーマン的地域性に比較して、労働者の多い工業生産地域としての特性がみられる。ここでの調査対象の男女、年齢別主食パターンの実数と分布をみると表5の如くである。

まず、男についてみてみよう。前述の目黒区に比較して著しい特徴の第1は、30～39歳を除いて他のすべての年齢層において111パターンがもっとも多く30%を越えていることである。第2は、411パターンが30～39歳の若い年齢層において31.6%ともっとも高く、1位の主食パターンとなっているが、40歳以上になると20%以下、特に50～59歳ではわずかに12.4%であって著しく低い。第3は、30～39歳を除くと、第2位の主食パターンはいずれの年齢層でも131パターンであって、20%ないし30%の高い割合を占めていることである。第4は、141パターンが、131パターンに比較して著しく少なく、10%以下（40～49歳ではわずかに4.9%）となっていることである。第5は、“その他”パターンが5%前後であって、目黒区の男全体の21%と比較して著しく少ない。同じく東京都の目黒区の男の主食パターンの分布と比較してこのような著しい差異のあることは注目しなければならない。

次に女についてみてみよう。男とはほぼ同様な分布パターンを示しているが、特に注目される点は141パターンが、一般に男よりも多いことである。このパターンは男全体として7.5%であるのに対

表5 東京都墨田区男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	708(100.0)	230(32.5)	156(22.0)	53(7.5)	150(21.2)	42(5.9)	38(5.4)
	30～39	193(100.0)	52(26.9)	33(17.1)	14(7.3)	61(31.6)	16(8.3)	8(4.1)
	40～49	184(100.0)	67(36.4)	43(23.4)	9(4.9)	32(17.4)	12(6.5)	11(5.9)
	50～59	129(100.0)	41(31.8)	38(29.5)	12(9.3)	16(12.4)	4(3.1)	7(5.4)
	60 ≤	165(100.0)	59(35.8)	34(20.6)	14(8.5)	32(19.4)	7(4.2)	10(6.1)
女	総 数	751(100.0)	241(32.1)	151(20.1)	90(12.0)	155(20.6)	27(3.6)	49(6.5)
	30～39	194(100.0)	47(24.2)	37(19.1)	27(13.9)	51(26.3)	8(4.1)	12(6.2)
	40～49	176(100.0)	50(28.4)	33(18.8)	21(11.9)	42(23.9)	5(2.8)	17(9.7)
	50～59	151(100.0)	47(31.1)	32(21.2)	25(16.6)	25(16.6)	8(5.3)	5(3.3)
	60 ≤	179(100.0)	84(46.9)	35(19.6)	13(7.3)	25(14.0)	6(3.4)	9(5.0)

備考：年齢不詳男37，女51，主食パターン不詳男39，女38を除いた。なお，()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

し、女全体では12.0%と高い。男ではすべての年齢で10%未満の低水準であるのに対して、女では60歳以上を除くとすべて10%以上の高い割合を示している。女の60歳以上では、111パターンが46.9%で圧倒的に多く、131パターンの19.6%とこの2つのパターンが支配的となっていることが注目される。いずれにしても、目黒区に比較すると、墨田区では主食パターンの分布の多様化の度合ははるかに低いといえよう。同じく東京都の巨大都市の一部であっても、地域住民の社会的、経済的属性や産業的特徴によって主食パターンが強く影響されることを示唆している。

IV 広島市男女、年齢別主食パターン分布の特徴

広島市の男女別、年齢別にその主食パターンの分布を示すと表6の如くである。

男女別、年齢別に特に注目される点は、男では、50～59歳を除いて、111パターンが最高の割合を占めているのに対して、女では60歳以上を除いて、411パターンをとるものの割合がもっとも高くなっており、両者が反対の位置にあることである。男は111パターンを女は411パターンを軸にした主食パターンの分布を示しているということである。

いずれにしても、広島市では、111と411の2つのパターンがそれぞれ30%、40%を占めて、全体の70%以上を占めていることが特徴的である。

また、131あるいは141のパターンにおいて、男が一般的に131パターンをとっているのに対して、女では131と141の2つのパターンにほぼ同様な割合が分布しているといった差異がみとめられる。011パターンをとるものの割合は、男において若干高く、かつ若い年齢層において多くなっている。

広島市のばあい、111と411の2つのパターンが支配的となっているが、女のばあいは411パターンの方が111パターンよりも多く、また131あるいは141パターンにほぼ同じ割合で分布しているなど、男よりも多様化している傾向がみとめられる。

次に広島市のホワイト・カラー層の多い地域とブルー・カラー層の多い地域とに区分して、男女別

表6 広島市男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	1,400(100.0)	564(40.3)	89(6.4)	57(4.1)	490(35.0)	67(4.8)	100(7.1)
	30 ~ 39	416(100.0)	167(40.1)	30(7.2)	8(1.9)	156(37.5)	24(5.8)	26(6.3)
	40 ~ 49	393(100.0)	167(42.5)	26(6.6)	22(5.6)	128(32.6)	18(4.6)	26(6.7)
	50 ~ 59	276(100.0)	102(37.0)	15(5.4)	7(2.5)	107(38.8)	13(4.7)	26(9.5)
	60 ≤	254(100.0)	106(41.7)	13(5.1)	20(7.9)	78(30.7)	5(2.0)	18(7.1)
女	総 数	1,539(100.0)	525(34.1)	88(5.7)	124(8.1)	630(40.9)	40(2.6)	98(6.4)
	30 ~ 39	422(100.0)	123(29.1)	27(6.4)	32(7.6)	183(43.4)	19(4.5)	32(7.5)
	40 ~ 49	423(100.0)	133(31.4)	23(5.4)	24(5.7)	193(45.6)	8(1.9)	32(7.6)
	50 ~ 59	289(100.0)	101(34.9)	13(4.5)	26(9.0)	123(42.6)	3(1.0)	16(5.5)
	60 ≤	316(100.0)	144(45.6)	18(5.7)	36(11.4)	91(28.8)	5(1.6)	14(4.4)

備考：年齢不詳男61，女89，主食パターン不詳男33，女34を除いた。なお，()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

表7 広島市ホワイト・カラー層の多い地区男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	784(100.0)	284(36.2)	56(7.1)	31(4.0)	284(36.2)	44(5.6)	62(7.9)
	30 ~ 39	227(100.0)	87(38.3)	19(8.4)	3(1.3)	82(36.1)	17(7.5)	15(6.6)
	40 ~ 49	235(100.0)	92(39.1)	17(7.2)	12(5.1)	85(36.2)	10(4.3)	15(6.4)
	50 ~ 59	154(100.0)	51(33.1)	8(5.2)	3(1.9)	63(40.9)	10(6.5)	16(10.4)
	60 ≤	133(100.0)	43(32.3)	9(6.8)	13(9.8)	42(31.6)	1(0.8)	13(9.8)
女	総 数	834(100.0)	243(29.1)	63(7.6)	77(9.2)	345(41.1)	23(2.8)	61(7.3)
	30 ~ 39	233(100.0)	60(25.8)	18(7.7)	18(7.7)	100(42.9)	11(4.7)	22(9.4)
	40 ~ 49	247(100.0)	61(24.7)	21(8.5)	17(6.9)	119(48.2)	6(2.4)	19(7.7)
	50 ~ 59	145(100.0)	45(31.0)	8(5.5)	15(10.3)	62(42.8)	1(0.7)	11(7.6)
	60 ≤	160(100.0)	68(42.5)	11(6.9)	21(13.1)	43(26.9)	3(1.9)	6(3.8)

備考：年齢不詳男35，女49，主食パターン不詳男23，女22を除いた。なお，()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

に年齢別とその主食パターンの分布をみると表7，表8の如くである。ホワイト・カラー層の多い地区の男では111と411パターンとが同じ水準(36.2%)であるのに対して，女では411パターンが圧倒的に多く41.4%を占め，111パターンの29.1%よりもはるかに高くなっている。年齢別にみると，男では111パターンをとるものの割合が50歳未満で比較的高く，50歳以上で低くなっている。しかし，女では50歳未満で111パターンをとるものの割合は25%前後で著しく低く，50歳以上で31.0%，42.5%と増大している。女では60歳以上を除いて，411パターンをとるものの割合は圧倒的に高い。また，131あるいは141のパターンでは，男は131パターンをとるものが多いのに対し，女は両者のパターン

表8 広島市ブルー・カラー層の多い地区男女、年齢別主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	616(100.0)	280(45.5)	33(5.4)	26(4.2)	206(33.4)	23(3.7)	38(6.2)
	30～39	189(100.0)	80(42.3)	11(5.8)	5(2.6)	74(39.2)	7(3.7)	11(5.8)
	40～49	158(100.0)	75(47.5)	9(5.7)	10(6.3)	43(27.2)	8(5.1)	11(7.0)
	50～59	122(100.0)	51(41.8)	7(5.7)	4(3.3)	44(36.1)	3(2.5)	10(8.2)
	60 ≤	121(100.0)	63(52.1)	4(3.3)	7(5.8)	36(29.8)	4(3.3)	5(4.1)
女	総 数	705(100.0)	282(40.0)	25(3.5)	47(6.7)	285(40.4)	17(2.4)	37(5.2)
	30～39	189(100.0)	63(33.3)	9(4.8)	14(7.4)	83(43.9)	8(4.2)	10(5.3)
	40～49	176(100.0)	72(40.9)	2(1.1)	7(4.0)	74(42.0)	2(1.1)	13(7.4)
	50～59	144(100.0)	56(38.9)	5(3.5)	11(7.6)	61(42.4)	2(1.4)	5(3.5)
	60 ≤	156(100.0)	76(48.7)	7(4.5)	15(9.6)	48(30.8)	2(1.3)	8(5.1)

備考：年齢不詳男26，女40，主食パターン不詳男10，女12を除いた。なお，()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

の割合がほぼ同じ程度である。

しかし，広島市のブルー・カラー層の多い地区では，ホワイト・カラー層の多い地区とはかなり異なった主食パターンの分布構造がみられる。男では，111パターンがもっとも多く支配的なパターンとなっており，かつ年齢の上昇と共に増大する傾向がある。60歳以上の男では52.1%で半分を越えている。女では111パターンと411パターンが40%の同水準にある。この点では，111パターンの著しく低いホワイト・カラー層の多い地区とは著しく異なっている。また，ブルー・カラー層の多い地区の女では131より141のパターンが多いことも，ホワイト・カラー層の多い地区の女と異なっている点である。このように，同じ広島市といっても，ホワイト・カラー層の多い地区とブルー・カラー層の多い地区との間ではかなり著しい主食パターンの分布の差異がみとめられる。

V 山形市の男女、年齢別主食パターン分布の特徴

山形市の男女別，年齢別に主食パターンの分布をみると表9の如くである。

111パターンをとるものの割合は，男では52.0%，女では50.9%でわずかに男において多い。しかし，411パターンと131あるいは141パターンの合計は，男よりも女に多く，特に141パターンでは男の約2倍，411パターンでは1.7倍と高くなっていることが注目される。いいかえれば，主食パターンは，男より女において多様化が著しいということがここでもいえる。

年齢別にみると，111パターンでは女において特に規則的な傾向がみられる。すなわち，若い年齢層において少なく，年齢の上昇と共に増大している。男では60歳以上においてもっとも多く55.2%となっているが，もっとも少ないのは50～59歳の49.5%，30～39歳および40～49歳ではそれぞれ51%の水準にあり，年齢別には女のばあいほどの規則性はない。411パターンおよび141パターンでは，男女共に年齢との規則性がみられる。すなわち411パターンをとるものの割合では男女共に年齢の増大にもなって規則的に減少する傾向がみられる。また，131パターンをとるものの割合では，年齢の上昇

表9 山形市男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	1,630(100.0)	848(52.0)	375(23.0)	86(5.3)	76(4.7)	69(4.2)	130(8.0)
	30 ~ 39	435(100.0)	225(51.7)	88(20.2)	15(3.4)	28(6.4)	33(7.6)	29(6.7)
	40 ~ 49	419(100.0)	214(51.1)	107(25.5)	20(4.8)	16(3.8)	11(2.6)	35(9.8)
	50 ~ 59	317(100.0)	157(49.5)	84(26.5)	19(6.0)	14(4.4)	13(4.1)	21(6.6)
	60 ≤	388(100.0)	214(55.2)	85(21.9)	29(7.5)	13(3.4)	6(1.5)	28(7.2)
女	総 数	1,856(100.0)	945(50.9)	395(21.3)	168(9.1)	100(5.4)	61(3.3)	117(6.3)
	30 ~ 39	405(100.0)	183(45.2)	89(22.0)	44(10.1)	33(8.1)	21(5.2)	25(6.2)
	40 ~ 49	446(100.0)	210(47.1)	93(20.9)	46(10.3)	22(4.9)	11(2.5)	40(8.9)
	50 ~ 59	399(100.0)	202(50.6)	81(20.3)	36(9.0)	28(7.0)	12(3.0)	24(6.1)
	60 ≤	511(100.0)	302(59.1)	113(22.1)	35(6.8)	10(2.0)	13(2.5)	23(4.5)

備考：年齢不詳男71，女95，主食パターン不詳男46，女70を除いた。なお，()内数値は%を示した。
 主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
 411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

と共に規則的に増大する傾向が男女を通じてみとめられる。

しかし，131パターンでは年齢による著しい差異は，男女共にみられない。男では，50～59歳でもっとも高く26.5%を示しているが，30～39歳および60歳以上ではそれぞれ20.2%，21.9%と低い。特に女においては，いずれの年齢層でも20～22%の狭い範囲に集中しており，年齢間の差異はほとんどないといってよいであろう。011パターンでは，男女共にもっとも若い30～39歳で一番高く男7.6%，女5.2%となっており，その他の年齢層では男女共に2～3%と著しく少ない。“その他”パターンでは，男女ともに40～49歳層でもっとも高く，男は9.8%，女では8.9%となっており，注目される点である。

次に山形市のホワイト・カラー層の多い地区についてみると表10の如くである。

ホワイト・カラー層の多い地区の主食パターンの分布の大きな特徴は，男女ともに111パターンが支配的でありながら，50%以下の水準にあって，131あるいは141パターンの比重が大きいことである。特に，女においてこの傾向は著しい。それは，131パターンをとるものの割合が20%以上にあつて，かつ141パターンが10%を越えているという点にみられる。男のばあいは，131パターンをとるものの割合は，女と同様20%以上の水準にあるが，141パターンをとるものの割合は，女の10.9%の半分余の6%にすぎない。

年齢別にみると，111パターンの割合は，男では不規則であつて，30～39歳の46.0%を最高としてそのあと年齢の上昇と共に低下し，60歳以上において49.0%ともっとも高い割合を示している。しかし，女のばあいは比較的年齢に対し規則的な傾向を示している。30～39歳および40～49歳では42%のほぼ同水準にあるが，50～59歳では44.4%，60歳以上では50.8%と増大している。

131あるいは141のパターンについてみると，男ではいずれも年齢の上昇と共に増大する傾向がみられるが，女では年齢間の差は極めて小さい。ただ，女の60歳以上では昼めんパターンの割合が他の年齢に比較してもっとも高く26.3%となり，141パターンは他の年齢に比較してもっとも小さく8.8%となっており，また111パターンが50.8%ともっとも高くなっている点に特徴がみられる。

411パターンでは男女共に若い年齢層でもっとも多く，年齢と共に減少している。男女間の差は小

表10 山形市ホワイト・カラー層の多い地区男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	1,141(100.0)	520(45.6)	294(25.8)	70(6.1)	63(5.5)	58(5.1)	112(9.8)
	30 ~ 39	313(100.0)	144(46.0)	71(22.7)	13(4.2)	24(7.7)	26(8.3)	26(8.3)
	40 ~ 49	301(100.0)	135(44.9)	87(28.9)	15(5.0)	12(4.0)	11(3.7)	35(11.6)
	50 ~ 59	216(100.0)	89(41.2)	65(30.1)	15(6.9)	11(5.1)	11(5.1)	20(9.3)
	60 ≤	261(100.0)	128(49.0)	64(24.5)	24(9.2)	12(4.6)	5(1.9)	25(9.6)
女	総 数	1,296(100.0)	578(44.6)	306(23.6)	141(10.9)	84(6.5)	45(3.5)	105(8.1)
	30 ~ 39	322(100.0)	135(41.9)	74(23.0)	39(12.1)	27(8.4)	15(4.7)	22(6.8)
	40 ~ 49	303(100.0)	126(41.6)	70(23.1)	34(11.2)	15(5.0)	10(3.3)	37(12.2)
	50 ~ 59	279(100.0)	124(44.4)	62(22.2)	30(10.8)	25(9.0)	7(2.5)	23(8.2)
	60 ≤	331(100.0)	168(50.8)	87(26.3)	29(8.8)	10(3.0)	10(3.0)	19(5.7)

備考：年齢不詳男50，女61，主食パターン不詳男24，女37を除いた。なお，()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

さい。011パターンは，男の方が女よりも一般に多いが，若い年齢で多く，年齢の上昇と共に減少する傾向は男女に共通にみられる傾向である。

“その他”パターンは，男の平均で約10%，女で8%と若干差がある。ここで注目すべき点は，男女共に40～49歳の年齢層でこのパターンがもっとも多いということである。男女共にほぼ12%となっている。生活水準も社会的地位も比較的高くなったこの年齢層において，主食パターンの多様化する傾向の強くなることも予想されそうである。

次に，山形市のブルー・カラー層の多い地区について考察してみよう（表11参照）。

表11 山形市ブルー・カラー層の多い地区男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン						
		111	131	141	411	011	そ の 他	
男	総 数	489(100.0)	328(67.1)	81(16.6)	16(3.3)	13(2.7)	11(2.2)	18(3.7)
	30 ~ 39	122(100.0)	81(66.4)	17(13.9)	2(1.6)	4(3.3)	7(5.7)	3(2.5)
	40 ~ 49	118(100.0)	79(66.9)	20(16.9)	5(4.2)	4(3.4)	—(—)	6(5.1)
	50 ~ 59	101(100.0)	68(67.3)	12(11.9)	4(4.0)	3(3.0)	2(2.0)	1(1.0)
	60 ≤	127(100.0)	86(67.7)	21(16.5)	5(3.9)	1(0.8)	1(0.8)	8(6.3)
女	総 数	560(100.0)	367(65.5)	89(15.9)	27(4.8)	16(2.9)	16(2.9)	12(2.1)
	30 ~ 39	83(100.0)	48(57.8)	15(18.1)	2(2.4)	6(7.2)	6(7.2)	3(3.6)
	40 ~ 49	143(100.0)	84(58.7)	23(16.1)	12(8.4)	7(4.9)	1(0.7)	3(2.1)
	50 ~ 59	120(100.0)	78(65.0)	19(15.8)	6(5.0)	3(2.5)	5(4.2)	1(0.8)
	60 ≤	180(100.0)	134(74.4)	26(14.4)	6(3.3)	—(—)	3(1.7)	4(2.2)

備考：年齢不詳男21，女34，主食パターン不詳男22，女23を除いた。なお，()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131 = 昼めん，朝・夕米飯 141 = 昼パン，朝・夕米飯
411 = 朝パン，昼・夕米飯 011 = 朝欠食，昼・夕米飯

ブルー・カラー層の多い地区の主食パターンの分布の特徴を一言でいえば、ホワイト・カラー層の多い地区に比較して、111パターンに著しく強く傾斜していることである。たとえば、男では111パターンをとるものの割合はいずれの年齢でも66～67%でほとんど差はなく、131パターンが年齢において若干の差はみられるが12%ないし17%であって、この2つのパターンで各年齢ともに80%以上(50～59歳のみがわずかに低く79%)を占めている。

女では、111パターンの割合が年齢が上昇すると共に増大し、また131パターンの割合は、反対に、年齢の上昇と共に減少している。この2つのパターンの合計では30～39歳が75.9%、40～49歳が74.8%、50～59歳が80.8%、60歳以上が88.8%と年齢によってかなり著しい差があるが、この2つのパターンに集中している傾向は否定できない。

したがって、これらのパターン以外をとるものの割合もホワイト・カラー層の多い地区に比較すると著しく低い。しかし、ブルー・カラー層の多い地区の調査対象数が少なく、特に男女、年齢別に主食パターン別に区分すると著しく少なくなるため、統計上の誤差の影響が大きいことも考慮されなければならないであろう。しかし、上述のようなホワイト・カラー層の多い地区とブルー・カラー層の多い地区間の差異の存在は、その度合は別として、じゅうらいからの調査からみても肯定してよいであろう。

VI 宮城県(平地農村)の男女、年齢別主食パターン分布の特徴

宮城県の調査対象地域であった桃生町、志波姫町、米山町の3町を個別的にみないで、合計した結果について考察してみよう。それは、ここでは平地農村の個々の町の特徴をみることに目的ではなく、宮城県の平地農村の特徴をみることを目的とした。個別にみると同じく平地農村であっても、個別の特徴が強くあらわれ過ぎるため、これをかんわするためには全体を一括した方が望ましい。このようにして、宮城県の調査地域の3町を合計した結果を示すと表12の如くである。

表12 宮城県(平地農村)男女、年齢別、主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン					
		111	131 + 141	411	011	そ の 他	
男	総 数	2,124(100.0)	1,656(78.0)	176(8.3)	10(0.4)	13(0.6)	18(0.8)
	30 ~ 39	412(100.0)	314(76.2)	37(9.0)	3(0.7)	5(1.2)	2(0.5)
	40 ~ 49	553(100.0)	435(78.7)	38(6.9)	3(0.5)	3(0.5)	—(—)
	50 ~ 59	468(100.0)	342(73.1)	42(9.0)	1(0.2)	3(0.6)	5(1.1)
	60 ≤	553(100.0)	462(83.5)	39(7.1)	3(0.5)	1(0.2)	10(1.8)
女	総 数	2,408(100.0)	1,857(77.1)	232(9.6)	23(0.9)	9(0.4)	14(0.6)
	30 ~ 39	406(100.0)	303(74.6)	42(10.3)	8(2.0)	4(1.0)	2(0.5)
	40 ~ 49	582(100.0)	447(76.8)	47(8.1)	4(0.7)	—(—)	3(0.5)
	50 ~ 59	540(100.0)	377(69.8)	66(12.2)	4(0.7)	3(0.6)	5(0.9)
	60 ≤	702(100.0)	587(83.6)	45(6.4)	4(0.5)	2(0.3)	4(0.6)

備考：年齢不詳男138 女178、主食パターン不詳男251、女273を除いた。なお、()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯 131+141 = 昼めんあるいはパン、朝・夕米飯
411 = 朝パン、昼・夕米飯 011 = 朝欠食、昼・夕米飯

予想される如く、この平地農村における主食パターン分布の特徴は、男女共に111パターンに集中していることである。男女共に全体として77～78%の水準にある、しかし、年齢別にみると若干の差異がみとめられる。60歳以上では男女ともに83.5%、83.6%とほとんど同水準にあって著しく高い。しかし、男では50～59歳でもっとも低く73.1%、同様に女においてもこの年齢層でもっとも低く69.8%を示している事が注目される。このことは他の調査対象地域においてもみられたが、111パターンをとるものの割合が高い農村であっても、他の年齢に比較して50～59歳の男女がともに、もっとも低いということの理由をあきらかにすることはこんなである。

141あるいは131パターンは、あわせて10%前後の主要な主食パターンとなっているが、その他の主食パターンの割合は極めて少ない。例えば、411パターンは男女ともに全体として0.4%(男)、0.9%(女)にすぎない、

また、011パターンも男女を通じて0.5%前後、“その他”パターンも男女平均7%にすぎない。年齢別にみるとある程度の差はあるが、その水準はいずれも極めて低い。

Ⅶ 鹿児島県（農山村）の男女、年齢別主食パターンの分布の特徴

鹿児島県の調査対象地域である大根占町、祁答院町、大浦町の3町を、宮城県のばあいと同様にまとめて鹿児島県の農山村として考察してみよう。その理由は、宮城県のばあいについてのべたと同様のものである。

宮城県（平地農村）のばあいにみられた様に、男女とも111パターンに著しく依存している。しかし、宮城県（平地農村）の対象地域とかなり著しく異なっているのは、この111パターンの比重である。宮城県（平地農村）のばあいには、男女共に111パターンをとるものの割合は、80%以下であったのに対して、鹿児島県（農山村）のばあいは、90%に近い高水準にある。

したがって、また宮城県（平地農村）のばあいは、141あるいは131のパターンが10%に近い水準を

表13 鹿児島県（農山村）男女、年齢別主食パターンの分布

年 齢	総 数	主 食 組 合 せ パ タ ー ン					
		111	131 + 141	411	011	そ の 他	
男	総 数	1,537(100.0)	1,372(89.3)	39(2.5)	28(1.8)	12(0.8)	17(1.1)
	30 ~ 39	163(100.0)	146(89.6)	5(3.1)	1(0.6)	2(1.2)	4(2.5)
	40 ~ 49	371(100.0)	344(92.7)	8(2.2)	5(1.3)	2(0.5)	4(2.5)
	50 ~ 59	362(100.0)	317(87.6)	8(2.2)	5(1.4)	4(1.1)	4(1.1)
	60 ≤	545(100.0)	484(88.8)	14(2.6)	15(2.8)	4(0.7)	7(1.3)
女	総 数	1,849(100.0)	1,587(85.8)	52(2.8)	57(3.1)	43(2.3)	17(0.9)
	30 ~ 39	209(100.0)	180(86.1)	6(2.9)	11(5.2)	4(1.9)	3(1.4)
	40 ~ 49	383(100.0)	337(88.0)	11(2.9)	9(2.3)	6(1.6)	1(0.3)
	50 ~ 59	453(100.0)	381(84.1)	11(2.4)	13(2.9)	13(2.9)	3(0.7)
	60 ≤	644(100.0)	565(87.7)	20(3.1)	18(2.8)	17(2.6)	7(1.1)

備考：年齢不詳男96，女160主食パターン不詳男69，女93を除いた。なお、()内数値は%を示した。

主食パターンの記号は次の如くである。

111 = 3食米飯

131+141 = 昼めんあるいはパン、朝・夕米飯

411 = 朝パン食、昼・夕米飯

011 = 朝欠食、昼・夕米飯

示し、111パターンを補足する重要な主食パターンとなっているのに対し、鹿児島県（農山村）では、この141または131パターンは3%以下の低水準であり、111パターンが圧倒的であるといえる。

111パターンをとるものの割合を男女別にみると男の方が若干高い。年齢別にみると、男では40～49歳層でもっとも高く92.7%となっており、50～59歳層では87.6%ともっとも低い。しかし、年齢による特定の傾向はみられない。

女についてみても、40～49歳層でもっとも高く、88%となっており、また50～59歳層でもっとも低く84.1%というように、男のばあいと全く同様であることが注目される。もっとも、水準の差もそれほど大きくないだけに偶然の一致であるとも思われる。

411パターンは、男の平均でみると1.8%に対して、女では3.1%と高く、かつ女では30～39歳のもっとも若い年齢層で一番高く5.2%となっている。しかし、男ではこのもっとも若い年齢の30～39歳層でもっとも低く0.6%となっており、女と対照的である。

141あるいは131パターンの合計では男女間、あるいは年齢間の差は極めて少なく、この地域では誰もが同じような水準の141あるいは131パターンをとっていることになる。

ま と め

本調査は、巨大都市、地方大都市、地方中都市および農村の典型的な地域を対象として、そこでの主食パターン分布の構造と特徴を分析したものである。その結果を要約してみると次の如くである。

第1は、筆者が今までの調査分析に使用した主食パターンの区分によると、地域による特徴は極めて著しいということである。それは基本的には111パターンをとるものの割合が大都市ほど少なく、地方都市、農村の順序にしたがって増大している。この傾向は、じゅうらいからの調査結果と一致している。

第2は、同じく巨大都市の内部にあっても、かなり著しい主食パターンの分布の差異がみとめられることである。たとえば、東京都の山手の代表的な地域である目黒区においては、111パターンをとるものの割合は、第4位の低水準にあつて、多様化した主食パターンの1つにすぎないのに対して、東京都の下町の代表としての墨田区では、111パターンをとるものの割合は低水準でありながら主食パターンとしてはもっとも重要な位置を占めている。

第3は、平地農村を対象とした宮城県および農山村を対象とした鹿児島県のいずれにおいても111パターンのものが80%前後といった高水準で、米飯中心の主食パターンを示していることである。

第4は、以上の典型的地域の主食パターンの分布構造から、日本人の主食パターンを次の5つの地域型に区分することができる。

A型：東京都目黒区に代表される最多様化型であつて、4つの主要パターンで構成されている。

411 (30.5%)、131+141 (22.3%)、"その他" (20.7%)、111 (19.6%) となっている。ここでは111パターンはもはや単に1つのパターンにすぎない低い位置にある。もっとも多様化した主食パターン構造の極限を示していると思われる。

B型：東京都墨田区に代表されるもので、ここでは111 (32.5%)、131+141 (29.5%)、411 (21.2%) の3つの主要パターンで構成されている。低水準とはいいながら、111パターンをとるものが32.5%で選択された主食パターンの中ではもっとも高い割合を示している。

C型：広島市に代表される2つの主要な主食パターンが構成されている。ここでは111 (40.3%)、411 (35.0%) となっている。131+141パターンは10.5%あるがなお低水準である。

D型：山形市にみられる型である。広島市と同じく2つの主要な主食パターンで構成されるが、第2の主要主食パターンが広島市では411パターンとなっているのに対し、山形市では131+141パターンになっている点において異なっている。ここでは、111パターンが50%を越えており、なお、有力なパターンである。

E型：宮城県（平地農村）や鹿児島県（農山村）にみられるものである。111パターンだけで80%前後という高水準の単一型を示しており、依然として米飯の役割がもっとも大きいのである。

以上は、主食パターン分布の地域構造をクロス・セクショナルに観察したものであるが、これを歴史的発展型の連続したものとして次の如く理解することもできよう。農村では80%ないし90%という人々が、111パターンに依存しているが、やがて中都市（山形市）に成長してくると、111パターンは全体の半分にまで低下し、他の主食パターンたとえば131あるいは141パターンの割合が著しく高まってくる。広島市のばあいは131あるいは141パターンよりも411パターンが第2の主要な主食パターンとなっている。つまり、第2の主要な主食パターンが131あるいは141か411パターンのいずれを選択するかはその地域の特性によるものであって、いずれにしても111パターンが第1位にある点では変りはない。山形市と広島市では人口規模に著しい差があるが、型としては中都市的なものとみなしてよいであろう。いずれにしても、この中都市の111パターンの割合が50%前後に低下すると共に、131あるいは141パターンあるいは411パターンのいずれかが第2の主要な主食パターンとして登場し、2つのパターンに分裂する段階として注目される。次いで、この2つのパターンから3つのパターンにさらに分裂する傾向が大都市において生ずる。そのばあひ111パターンはその支配的な位置を失なってくると共に131あるいは141パターンと411パターンの両者が主要な主食パターンとして登場して、3つのパターンに多様化する。この大都市の主食パターン構造の1つの極端なばあひが、東京都目黒区にみられた4つの主要な主食パターンで構成される最多様化型である。

このような主食パターンの地域的類型化については、筆者は昭和38年度の「労働力人口移動実態調査報告書」（都市の部第3巻、人口移動と生活行動）において、主食パターンのモデル化を試み、Ⅰ純日本型（3食米飯）、Ⅱ日本の粉食型（朝・夕米飯で昼がめん類あるいはパン類）、Ⅲ欧風の日本型（朝パン、昼・夕米飯か朝パン、昼めん、夕米飯または朝パン、昼パン、夕米飯の3つのパターン）に区分し、その発展段階を示唆しておいた。このような発展過程を地域的に表現したものが前述の地域的主食パターンの型であるといえよう。

以上の分析の示唆する重要な点は、山形市、広島市にみられるような都市型主食パターンが将来においてますます重要な役割を示すことになるであろうということである。それは、日本列島における人口分布が、大都市や大都市圏への極端な集中傾向の段階が終りをつげ、地方都市への人口集中の傾向が始まったからである。中都市型主食パターンの特徴は、111パターンを中心として、411パターン、131あるいは141パターンを軸とする、3分パターンであって、これが日本人の代表的な主食パターンとなっていかどうかについては、中都市型主食パターンについての一層の詳細な現状分析が必要である。

本研究においては、地域別、男女別に年齢別（30歳以上）の詳細な主食パターンの分布について分析を行なっているが、この点については本文によって参照されたい。ただ、ここで附記しておきたいことは、本調査の対象者が30歳以上に限定されるため、それ以下の年齢との比較ができないことである。しかし、ここでのもっとも若い年齢層である30～39歳においても特に大都市では111パターンは著しく減少し、いくたの異なった主食パターンに多様化していること、また地方都市や特に農村では

反対に 111 パターンがこの若い年齢層においても圧倒的に多く、支配的なパターンとなっていることである。

Diversification of Staple Food Patterns
by Area, Sex, and Age —From
Field Survey Results Conducted in 1979—

Sumiko UCHINO

1. As part of the field survey on the Change of Life Structure Accompanied by Population Aging in Japan conducted by the Institute of Population Problems in 1979, survey questionnaires concerning staple food patterns were included. Seven areas were selected, including two special wards, Meguro-ku and Sumida-ku in Tokyo Metropolis, Hiroshima-city, Yamagata-city, and three towns from Miyagi and Kagoshima Prefectures respectively. 18,788 questionnaires were distributed, and 18,337 were collected, ratio of collection being 97.6%.

2. Surveyed areas represent typical metropolitan, large city, local middle city, and rural, agricultural areas. Staple food dish is divided into six patterns by combination of different sets of staple food taken for three meals a day. Namely, (1) rice for three meals, (2) rice for breakfast and dinner, and noodle for lunch, (3) rice for breakfast and dinner, and bread for lunch, (4) bread for breakfast, rice for lunch and dinner, (5) no staple food for breakfast, and rice for lunch and dinner, (6) other patterns.

3. Major findings are summarized as follows:

First, staple food patterns are remarkably different from area to area represented by urbanization, which has been demonstrated by the author's repeated field surveys for many years. Fundamental trends in dietary custom in taking staple food are characterized by highly dependency on rice-oriented dishes for three meals for a day in small-medium city and rural areas, and less and less frequency of rice-oriented meals in metropolitan and big cities.

Secondly, even in the different areas located in the same giant cities like Tokyo, remarkable difference of staple food pattern is recognized, for example, in Meguro-ku characterized by so-called Yamate, meaning something like residential area, and Sumida-ku characterized by so-called Shitamachi, meaning small scale industrial area. Meguro-ku shows extremely low proportion of people having rice-oriented pattern for three meals, which is only one pattern among four major patterns. However, in Sumida-ku, pattern of rice taking for three meals, occupies most important one among several patterns, even though the proportion itself is not high.

Thirdly, in both rural areas of Miyagi and Kagoshima prefectures, the rice-oriented pattern for three meals shows dominant position, proportion of people taking this pattern being as high as 80%.

Fourthly, on the basis of survey results outlined above, five major types of staple food patterns could be distinguished by follows ;

A type: most diversified one, represented here by Meguro-ku, actually composed of four major staple food patterns. Namely, bread at breakfast, 30.5%, bread or noodle at lunch, 22.3%, rice for three meals, 19.6%, and other patterns, 20.7% are major ones.

B type: represented by Sumida-ku, composed of three major patterns, namely rice for three meals (32.5%), bread or noodle for lunch (29.5%), and bread for breakfast (21.2%).

C type: represented by Hiroshima-city, composed of two major patterns, namely rice for three meals (40.3%), and bread for breakfast (35.0%).

D type: represented by Yamagata-city, composed of two major patterns, namely rice for three meals (52.0%), and bread or noodle for lunch (28.3%). Only difference between C and D is dominance of bread for breakfast in case of C, against dominance of bread or noodle for lunch as second major pattern in case of D.

E type: represented by rural areas in Miyagi and Kagoshima prefectures, composed of only one dominant pattern of rice for three meals.

In concluding, in view of remarkably increasing trend of population in middle cities like Hiroshima-city and Yamagata-city, and decreasing trend of population in giant cities and rural areas, more attention should be given to C and D types of staple food patterns, and intensive, comprehensive studies on dietary custom in middle-sized cities should be developed.